

P-5B-263

新人看護師に対する看護診断教育の取り組み

北見赤十字病院 看護部 記録委員会

○山田 舞、寺山 葉子、恵美 真由美、八重樫 由希、中村 由美、尾崎 理加

【はじめに】K病院では電子カルテ運用開始後NANDA-I看護診断を取り入れている。的確な看護診断をして看護に結びつけられるように、学習会を定期的で開催している。しかし、アセスメント能力も未熟で現場経験の少ない新人を対象にしての学習会は行っていない。そこで看護診断の学習をキャリア開発ラダーのレベル1に取り入れ平成25年から開始した。

【目的】新人の時に看護診断の基礎を身につけ、的確な看護診断をして看護に結びつけられるようにする。また、看護診断に関して未経験の中途採用者が、基本的な知識のもとに看護診断を臨床で活用していきけるようにする。【方法】平成25年度は5月に「看護過程と看護診断」として看護過程の復習と看護診断の基礎の講義をして、その後極々簡単な事例で活用について学んでもらった。2年目の平成26年度は看護過程の復習は別枠に設け、講義を中心とした看護診断の基礎を5月に開催し、事例を用いての学習会を10月に開催した。兩年とも講義のあとにe-ラーニングで事後の知識確認を行った。

【結果・考察】出席者のほとんどは基礎教育で看護診断を学ぶ機会があったが初めて知ることでも多かった。事後に行ったe-ラーニングの結果からは、看護診断は臨床判断であるという大切なことは理解できている。しかし、NANDA-I看護診断の組み立てについての理解は不十分である。実践の中で看護診断を活用出来るように2年目には事例展開を取り入れた。それにより、基礎知識をどのように看護過程の中で活用していくか学べていた。診断名の理解や必要データの収集と整理、データに基づいたアセスメントについてはまだまだ未熟である。レベル1の研修で学んだことを実践に結びつけ、レベルアップしていくための継続教育をどのようにしていくかが今後の課題である。

P-5B-265

シナリオを使用した演習の実践報告

石巻赤十字病院 看護専門学校

○葛藤 ひろ子、越川 暢恵、森岡 薫

【目的】今回、当校の全教員でシナリオを使用したシミュレーション演習（以下演習）に取り組んだ。この取り組みを振り返り報告する。

【方法】A看護専門学校学生を対象に看護専門7領域で演習を実施した。演習直後に学習者シナリオ評価（阿部幸恵著：看護のためのシミュレーション教育のはじめの一手ワークブック）を用い学生に無記名自記式でアンケートを行った。内容は「事前学習・ブリーフィング」（6項目）、「シミュレーション」（8項目）、「デブリーフィング」（14項目）、「全体的な事柄」（2項目）の30項目について、肯定的評価である「はい」と否定的評価である「いいえ」で回答を求めた。また、全ての演習終了後に、教員に記名自記式で、演習効果や課題とその対策等のアンケートを実施した。

【倫理的配慮】アンケート協力依頼に際し、個人情報保護、自由意思、成績等への影響がない事を説明し、その提出を持って同意とみなした。

【結果】1 学生の結果 各演習に参加した学生40名中、「はい」が80%以上は30項目中27項目であった。80%以下の項目は、項目別では『事前学習・ブリーフィング』の「事前学習」「環境、医学機器、医療材料などの使用方法の理解」と「シミュレーション」の「戸惑い過度な緊張」であった。領域別では在宅・成人・小児で「事前学習」が、在宅・成人・母性で「環境、医学機器、医療材料などの使用方法の理解」がそれぞれ低かった。「戸惑い過度な緊張」は全ての領域で低かった。2 教員の結果 教員は効果として「学生は主体的に取り組むことができていた」と感じていた。課題は「事前学習の多さと環境作り、緊張」があげられた。

【考察】事前学習や状況説明を適切にすることや緊張緩和の工夫をする必要がある。

P-5B-267

実践報告 SWOT 分析によるクラスの現状分析を

生かした看護師国家試験対策

富山赤十字看護専門学校

○田丸 早苗

本校の教育理念は「赤十字の理念を基調として、広く国際社会に貢献できる豊かな人間性と看護実践能力を兼ね備えた赤十字看護師を育成する」である。この理念のもと教育目的・目標を掲げ、理念達成に向け教育活動に取り組んでいる。学生たちは日々成長し、看護実践の基礎的能力を身につけ卒業しているが、看護実践基礎的能力を身につけたとしても必ずしも看護師国家試験に合格するとは限らない。看護師の資格取得を目的としている看護専門学校において国家試験に合格することは、最終目的でもあり最低限の目標ともいえる。目標達成のため本校においても国家試験模試の受験回数や時期の検討、グループ学習や弱い科目の学習会を設け国家試験対策を講じて学生をサポートしてきた。また最終的には個人の学習方法を尊重して対応してきた。今回、SWOT分析による現状分析をもとに看護師国家試験対策に取り組んだので報告する。現状として、例年より成績が悪い、よくできる学生が少ない、試験や実習の合格対策のみ、学習に取り組んでいないなどの現状が明らかとなった。また学校に対して批判的な態度や反発的な行動もみられるため、例年通りの国家試験対策は的確ではないと判断した。そこで学生の批判的な態度や反発心を学習へのパワーに向けられるように、模試結果でアドバイザー（担任）が実施する例年とは異なる強制学習を受けなければならない状況にして国家試験対策学習を実施した。アドバイザーは日頃からアセスメントしながらクラス運営しているが、改めてSWOT分析による現状分析を行うことで、クラスの強み弱みを捉え、クラスの特徴を生かした国家試験対策を実施できたと評価する。国家試験は無事全員合格した。

P-5B-264

当院看護師の「赤十字愛」の現状

～ Love is action 赤十字の理念を知ってますか？～

京都第一赤十字病院 看護部・ICU¹⁾、同 看護部²⁾、同 看護部 病床管理³⁾

○山本 圭介¹⁾、太田 のぞみ¹⁾、田中 由美子³⁾、緑 浩衣²⁾、中島 路子²⁾

本調査における「赤十字愛」の定義…赤十字7原則の理念に基づいて、赤十字職員としての自覚や赤十字活動に対する積極性。組織愛。

現在、当院では4月の新規入職者に対し継続的研修期間中に赤十字概論を実施し、赤十字職員としての意識付けを図っている。また平成18年度から導入された赤十字キャリア開発ラダーの評価項目内にも赤十字に関する指標を含み、入職以降の教育支援として赤十字概論に関する継続した研修会を開催している。

赤十字には7原則や8つの柱となる事業がある。しかし、現場の看護師からはそれらに関する認知度の低さを実感してきた。また赤十字ラダー取得のために受けているというような言動もあった。

このような背景から現状の院内の赤十字教育では、赤十字職員としての自覚・意識付けは不十分で、院内研修会とは別に継続的な働きかけが重要ではないかと感じていた。平成25年度より院内の赤十字活動の拡大を目的に各種講習会指導員により赤十字指導員会が発足した。指導員会発足を機に部署内研修を企画実施することにした。研修実施前に赤十字に関する調査を実施した所、7原則、標章の意味、赤十字活動内容を答えられたスタッフは非常に少なく、赤十字ラダー指標にある、「基本原則を意識しながら臨床実践をしている」と答えたスタッフは極少数であった。当院の赤十字への関心度を示す現状を知り、今回の研修を行う目的や意義が十分にあると感じたので結果を詳しく報告する。本研究は統計学的集計にて公表するため特定個人の情報が公開されることは一切ありません。

P-5B-266

新人看護職員の技術チェックリストの到達

盛岡赤十字病院 看護部

○葛藤 幸子、及川 千香子、目時 のり、藤根 美知子

【はじめに】当院新人看護職員技術チェックリストは厚生労働省新人看護職員ガイドライン「臨床実践能力の構造」項目を準拠している。今回新人看護職員研修の到達目標検討の基礎資料とするために平成26年度の新人看護職員の技術チェックリストの到達および業務の進捗状況を調査した。

【方法】1. 平成26年度技術チェックリストの集計 2. 11月時点での各部署での新人の出勤・夜勤・患者受け持ちと看護計画の立案等の業務進捗状況調査。

【結果】平成26年度新人看護職員19名のデータを用いた。清潔ケア、尿道留置カテーテル挿入はローテーション期間中に経験はできていた。厚生労働省が1年以内に（できる）を到達とした項目の中では「ネブライザーの実施」68.4%、「経管栄養法」47.4%、「褥瘡の予防」47.4%と到達率が低かった。救命・救急処置技術では「意識レベルの把握」「チームメンバーへの応援要請」「閉鎖式心臓マッサージ」「気道確保」の4項目は（できる）（指導のもとでできる）（演習でできる）の合計が70%以上の到達だが「気管挿管の準備と介助」の到達は52.6%だった。各部署の新人の業務進捗状況では、日勤で業務が1人で出来るようになったと管理者が感じた頃は7月～11月と幅があった。入職7か月時点で固定チームナースの受け持ち患者の中間サマリー、転院・転科サマリー記載未経験者が半数以上だった。

【考察】技術の到達度では、救命・救急処置技術の項目が到達していない。集合研修でシミュレーション研修を実施し、その後各部署でも研修しているはずだが、できる、指導のもとでできるレベルではないと認識していると考えられる。新人の業務の進捗状況には部署による差があり、夜勤に入る時期が遅くなっていることや全体として看護サマリーを書くこと自体が減少していることも影響していると考えられる。

P-5B-268

「各部署の対策活動報告会」の実施による効果と課題

名古屋第一赤十字病院 看護部、同 褥瘡対策チーム¹⁾、同 形成外科医師 褥瘡対策チーム²⁾

○宮本 諭美¹⁾、伊藤 真粧美¹⁾、林 祐司²⁾、須永 康代¹⁾

【はじめに】当院では年に10回褥瘡勉強会を開催し、褥瘡に関する知識の向上に努めている。各病棟では10名程のスキンケアナースを選任して、褥瘡発生予防対策に当たっている。褥瘡対策チームとして、各部署の取り組みを院内全体で共有する機会をつくり支援することを目的に、平成22年度から院内での「各部署の褥瘡対策活動報告会」を開始した。【結果・課題】初回の報告会は年1回開催。対象部署は、外来を除き22部署。発表時間を各3分とし2時間で実施した。報告会当初の発表内容は「スキンケアナースの役割」などが半数を占めていた。しかし、会を重ねるうちに、各部署の褥瘡対策における問題点に焦点を当て問題解決に向けた取り組み内容の報告「褥瘡発生を低下させるための取り組み～クッションマットを活用して」「スタッフ全員にDESIGN-Rを模範評価して」などに变化した。発表方法については、平成25年度から1年で半分11部署の発表とし、2年で全部が発表するようになった。発表時間も3分から5分に拡大した。「活動報告会」は5年を経過した。開催当初は発表時間が3分と短いこともあり、各部署の取り組み内容が時間内にうまく報告できず、他部署に伝わりにくい現状があった。そのため発表時間を5分に延長とした。アンケートの結果、90%の参加者が「発表時間は適切である」「隔年での発表により各部署の負担の軽減となった」と回答した。報告会当初の目的でもあった各部署の取り組みを院内全体で共有できる機会となっただけでなく、褥瘡対策や予防に対しスキンケアナース以外のスタッフにも学習する機会となっている。事例を発表して参加者とディスカッション方式も今後検討したい。褥瘡対策チームとして今後も「活動報告会」を継続してスタッフ支援していきたい。